

1 2 次曲線とは

定義 1.1. x, y の 2 次多項式

$$f(x, y) = a_{11}x^2 + 2a_{12}xy + a_{22}y^2 + b_1x + b_2y + c \quad (1)$$

(ただし, $a_{ij}, b_k, c \in \mathbf{R}$ は定数) に対し, 集合 $\{(x, y) \mid f(x, y) = 0\}$ を平面 \mathbf{R}^2 内の 2 次曲線 という.

例 1.2. 2 次曲線の例:

$$(i) y = x^2 \qquad (ii) \frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1 \qquad (iii) \frac{x^2}{a^2} - \frac{y^2}{b^2} = 1$$

放物線

楕円

双曲線

1.3. (1) 式は行列を用いて

$$f(x, y) = \begin{pmatrix} x & y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{12} & a_{22} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} x & y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \end{pmatrix} + c,$$

つまり, $A = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{12} & a_{22} \end{pmatrix}$, $\vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \end{pmatrix}$, $\vec{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$ とおくと

$$f(x, y) = {}^t\vec{x}A\vec{x} + {}^t\vec{x}\vec{b} + c \quad (2)$$

と表すことができる. 座標変換によって (2) 式を簡約化する.

2 次式の行列 A が対称行列 (つまり, ${}^tA = A$) でありことに注意する.

2 2 次式の簡約化

定理 2.1. 対称行列 A は直交行列で対角化可能である. つまり, 任意の n 次対称行列 A に対し,

$${}^tPAP = \begin{pmatrix} \alpha_1 & & & \\ & \alpha_2 & & \\ & & \ddots & \\ & & & \alpha_n \end{pmatrix} \quad (3)$$

を満たす n 次直交行列 P が存在する.

2.2. (2) 式の対称行列 A に対し,

$${}^tPAP = \begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 \\ 0 & \alpha_2 \end{pmatrix}$$

となる直交行列 P が存在したとする. この P に対し, $\vec{x} = P\vec{x}'$ と座標変換する. ただし, $\vec{x}' = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$. このとき, 2 次多項式 $f(x, y)$ は

$$\begin{aligned} & {}^t(P\vec{x}')A(P\vec{x}') + {}^t(P\vec{x}')\vec{b} + c \\ &= {}^t\vec{x}'({}^tPAP)\vec{x}' + {}^t\vec{x}'({}^tP\vec{b}) + c \\ &= \begin{pmatrix} X & Y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 \\ 0 & \alpha_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} x' & y' \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \beta_1 \\ \beta_2 \end{pmatrix} + c \\ &= \alpha_1 x'^2 + \alpha_2 y'^2 + \beta_1 x' + \beta_2 y' + c \end{aligned}$$

となる. ただし, ${}^tP\vec{b} = \begin{pmatrix} \beta_1 \\ \beta_2 \end{pmatrix}$ とおいた. つまり, 2 次方程式 $f(x, y) = 0$ は

$$\alpha_1 x'^2 + \alpha_2 y'^2 + \beta_1 x' + \beta_2 y' + c = 0 \quad (4)$$

と簡約化される.

2.3 ($\alpha_1 \neq 0$ かつ $\alpha_2 \neq 0$ の場合). (4) 式を x', y' に関して平方完成する;

$$\alpha_1 \left(x' + \frac{\beta_1}{2\alpha_1} \right)^2 + \alpha_2 \left(y' + \frac{\beta_2}{2\alpha_2} \right)^2 - \frac{\beta_1^2}{4\alpha_1} - \frac{\beta_2^2}{4\alpha_2} + c = 0.$$

定数項を右辺に移行して γ とおき, 適当な座標の平行移動を適用することにより,

$$\alpha_1 X^2 + \alpha_2 Y^2 = \gamma \quad (5)$$

とさらに簡約化される.

(i) 「 $\gamma = 0$ 」かつ「 α_1 と α_2 の符号が同じ」とき, (5) を満たす (X, Y) は $(0, 0)$ のみ である.

(ii) 「 $\gamma = 0$ 」かつ「 α_1 と α_2 の符号が異なる」とき, (5) は $Y = \pm \sqrt{\frac{\alpha_1}{\alpha_2}} X$ と式変形できる. つまり, (5) は 2 つの直線 を表す.

2.4 ($\alpha_1 \neq 0$ かつ $\alpha_2 \neq 0$ の場合の続き). $\gamma \neq 0$ のとき, (5) 式を γ で割ると

$$\frac{\alpha_1}{\gamma} X^2 + \frac{\alpha_2}{\gamma} Y^2 = 1. \quad (6)$$

(iii) 「 $\frac{\alpha_1}{\gamma}, \frac{\alpha_2}{\gamma}$ が共に正」のとき, この 2 次曲線は 楕円 である.

(iv) 「 $\frac{\alpha_1}{\gamma}, \frac{\alpha_2}{\gamma}$ の符号が異なる」のとき, この 2 次曲線は 双曲線 である.

(v) 「 $\frac{\alpha_1}{\gamma}, \frac{\alpha_2}{\gamma}$ が共に負」のとき, (6) を満たす (X, Y) は 存在しない.

2.5 (α_1, α_2 のいずれかが 0 の場合). $\alpha_2 = 0$ とすると, (4) 式は

$$\alpha_1 x'^2 + \beta_1 x' + \beta_2 y' + c = 0. \quad (7)$$

(vi) 「 $\beta_2 \neq 0$ 」のとき, (7) 式は

$$\alpha_1 \left(x' + \frac{\beta_1}{2\alpha_1} \right)^2 + \beta_2 \left(y' - \frac{\beta_1^2}{4\alpha_1\beta_2} + \frac{c}{\beta_2} \right) = 0$$

と書けるので, 適当に座標を平行移動することにより,

$$Y = -\frac{\alpha_1}{\beta_2} X^2$$

となる. したがって, この 2 次曲線は 放物線 である.

(vii) 「 $\beta_2 = 0$ 」のとき, (7) 式は

$$\alpha_1 x'^2 + \beta_1 x' + c = 0 \quad (8)$$

となる. この式を満たす (x', y') の集合は (8) の判別式 D の符号によって分類できる. つまり, (vii-1) $D > 0$ のときは y' 軸に平行な 2 直線, (vii-2) $D = 0$ のときは y' 軸に平行な 1 直線, (vii-3) $D < 0$ のとき, (8) を満たす (x', y') は 存在しない.

3 (3) を満たす直交行列 P の求め方

定理 3.1 (行列の対角化可能性). A を n 次正方行列とする. A の異なる固有値を $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_l$ とし, その重複度を m_1, m_2, \dots, m_l とする.

$$m_1 + m_2 + \dots + m_l = n$$

のとき, $P^{-1}AP$ が対角行列となるような正則行列 P が存在する. さらに, その対角行列の成分は A の固有値であり, 行列 P は A の固有値を並べた行列である.

定理 3.2. α_1, α_2 を対称行列 A の固有値, \vec{v}_1, \vec{v}_2 をそれぞれ α_1, α_2 に関する固有ベクトルとする. このとき, $\alpha_1 \neq \alpha_2$ ならば, \vec{v}_1 と \vec{v}_2 は直交する.

Proof. 仮定から $A\vec{v}_i = k_i\vec{v}_i$.

$$(A\vec{v}_1) \cdot \vec{v}_2 = (k_1\vec{v}_1) \cdot \vec{v}_2 = k_1(\vec{v}_1 \cdot \vec{v}_2).$$

一方,

$$(A\vec{v}_1) \cdot \vec{v}_2 = {}^t(A\vec{v}_1)\vec{v}_2 = {}^t\vec{v}_1 {}^tA\vec{v}_2 = {}^t\vec{v}_1 A\vec{v}_2 = {}^t\vec{v}_1 (A\vec{v}_2) = \vec{v}_1 \cdot (k_2\vec{v}_2) = k_2(\vec{v}_1 \cdot \vec{v}_2).$$

上の 2 式から $(k_1 - k_2)(\vec{v}_1 \cdot \vec{v}_2) = 0$. $k_1 \neq k_2$ ならば, $\vec{v}_1 \cdot \vec{v}_2 = 0$, つまり, \vec{v}_1 と \vec{v}_2 は直交する. \square

3.3 ((3) を満たす直交行列 P を求める手順).

- (1) A の固有値, 固有ベクトルを求める.
- (2) 固有値 α_i の重複度が 1 のとき, その固有ベクトルを長さが 1 になるに正規化する.
- (3) 固有値 α_i の重複度が m のとき, 固有値 α_i に関する固有ベクトルで互いに直交する単位ベクトルを m 個選ぶことができる.
- (4) 以上のように生成した A の固有ベクトルを n 個並べた行列を P とおく.